研究ノート

学生が読みかえるテクスト

—拙論「長崎原爆と伊東勇太郎」への補遺—

齋藤　一

昨年度（2018年）発行された『文学研究論集』第38号（2019年3月）に、私は「長崎原爆と伊東勇太郎」というタイトルの文章を投稿した。伊東勇太郎（1889年～1980年）は英文学者であり、「長崎高等商業学校・長崎経済専門学校・長崎大学経済学部で英語を担当、第二次世界大戦後の新制大学移行期には要職を務めた人物であるが、長崎原爆に応答した人でもある」（齋藤一「長崎原爆と伊東勇太郎」『文学研究論集』第38号、2019年3月、55）。伊東について書かれた文章は、資料の閲覧をお許しいただき、便宜を図って下さった長崎大学や瓊林会の方々のご助力もあり、長崎高等商業学校・長崎大学経済学部の同窓生雑誌『瓊林』や大学の広報部が発行していた『学園だより』に少なからず見つけることができた（この場を借りて心よりお礼申し上げたい）。ただし、核時代を生きた伊東の英文学者としての業績について検討した文章は、私が知る限りでは昨年の拙文以外には見当たらなかった。この文章を執筆したあとも私は調査を継続しているが、この文章ではその一部を報告したい。

私は、昨年の拙論において伊東の業績を再検討し、特に（1）伊東が『長崎新聞』（1945年12月）に、アメリカ人軍属のアーネスト・ロブソンの詩“Wound Time”を「創痍のあめつち」と題して翻訳し掲載したこと、（2）旧・長崎医科大学正門の慰霊碑文（鍋島直共が考案）を英訳したことについて触れた。その後、2019年夏の調査の際に、私の伊東についての研究のあり方について考え直す機会があった。つまり、拙論（2018）で示したように、伊東は英文学者として、英文テクストを媒介して長崎原爆に関わったのであり、私はその関わりのあり方を学び取ろうと苦心していたのではあるが、それは「核時代の英米文学者」の営為の一部でしかないということである。つまり、例えば伊東のような教師に英米文学テクストの読み方を学んだ学生たちも、やはり長崎原爆に関わっていたのであり、「核時代の英米文学者」は教師・研究者だけではなく、学生もまたそうであるという当然のことに、いまさらながら気がついたというわけである。

私が出会った資料とは、長崎高等商業学校（のちの長崎経済専門学校、長崎大学

経済学部）の卒業生が中心となって編集し、最近出版した被爆体験記である。非売品の単行本であるが、長崎原爆関係資料を収蔵している大学や公的図書館ならば閲覧することは難しくない。しかし、この体験記は寄稿者とその関係者以外の広い読者に向けられて出版されたものとは言い難い側面があるので、書名はこの文章においては明記しない。

この被曝体験記において私が注目したのは、Kという方の文章であった。Kは自らの被爆体験と学徒動員の記憶を綴りつつ、高等商業学校時代から現在の長崎大学経済学部のキャンパスがある長崎市片渕の下宿にいた人々の「その後」を記しており、それ自体一読の価値がある。ただし、私の取り組んでいる「核時代の英文学者」という研究テーマに照らしてみると、Kがその体験記の最後に掲載した、伊東勇太郎と、彼を囲んだ学生たちを撮影した一枚の写真とその説明文が非常に重要である。本論では説明文のみを引用しておく。

> 先生には各クラス毎に夫々異なったエッセイを暗誦させられましたが、今考えると当時の我々の人生にとって、極めて暗示的なものに思えます。半世紀を経たいま（中略）次のような一節が頭に残っています。
>
> It was an old belief of the poets and the common people, that Nature was sympathetic toward human beings at certain great crisis. The comets flared and the sun was darkened at the death of the friend.
>
> The willows, hazel, copses green
> Shall now no more be seen,
> Fanning their joyous leaves to thy soft rays,
> ……

学生時代のKが伊東に教授を受け暗誦し、半世紀後も記憶していたこの英文は、アイルランド生まれ、イギリスで活躍した作家・詩集編集者・エッセイストであり、シン・フェイン党の活動家でもあったRobert Wilson Lynd (1879 ～ 1949) のエッセイ集 *The Pleasures of Ignorance* (1921) に収録された "The Old Indifference" という文章の冒頭部分である。現在リンドはほぼ忘却された作家だが（リンドの経歴については以下のサイトを参照していただきたい：http://www.newulsterbiography.co.uk/index.php/home/viewPerson/882[2019年12月11日最終閲覧]）、かつては *Winnie the Pooh* (1926) の作者として有名なAlan Alexander Milne (1882 ～ 1956) などのエッセイとともに、日本の大学生向けの英語教科書にリンドのエッセイが採用されていたこともあるため、1940年代に伊東が長崎高商・長崎経専の英語の授業で使ってい

てもおかしくないと思われる。

以下、いくつか注目すべき点について記しておく。まずKの英文引用は、リンドの原文とは微妙に異なっているということだ。以下に"The Old Indifference"の冒頭の原文を引用する。

> It was an old belief of the poets and the common people that nature was sympathetic towards human beings at certain great crises. Comets flared and the sun darkened at the death of a great man(1). Even the death of a friend was supposed to bow nature with despair; and Milton in *Lycidas* mourned the friend he had lost in what nowadays seems to us the pasteboard hyperbole(2):
>
> The willows and hazel copses green
> Shall now no more be seen
> Fanning their joyous leaves to thy soft rays.

(Robert Lynd, *The Pleasures of Ignorance*, New York: Charles Scribner's Sons, 1921, 158、下線は筆者（齋藤）によるもの)

Kが暗誦していたテクストは、原文と定冠詞等々に若干の違いがあるが、重要なのは下線部(1)と(2)である。Kは"The comets flared and the sun was darkened at the death of the friend"と記しているが、リンドの原文は"Comets flared and the sun darkened at the death of a great man"である。そして、このセンテンスのあとの下線部(2)がKの記述では省略されている。この省略されたセンテンスの大意は、「かつては、友人が一人亡くなっただけでも、自然は悲しみにこうべを垂れると考えられたのだ。ミルトンも「リシダス」(1637年)で亡くなった友人（ケンブリッジ大学時代の友人だったエドワード・キング）の溺死を悼んでいるが、これは今では中身のない虚飾に見える」（拙訳）である。以下、このKによるリンドの引用は何を意味するのか考察するが、その前にまずはリンドのエッセイ全体の意味を概観しておきたい。

リンドのエッセイのタイトル"The Old Indifference"は、文章冒頭の"an old belief"に対応していることは明白である。後者（"an old belief"）は、偉人や友人が亡くなったとき、詩人も一般の人も、あたかも自然も嘆き悲しむかのように思っているところがあるということだが、前者（タイトル）は、この「昔からある思い込み」とは対照的に、自然は昔からずっと人の生死に無関心である（indifference）ということを簡潔に示しているわけである。

リンドの文章は以下のように続く。――ジョン・ミルトンが「柳・榛（はしばみ）の森の木も

（／やさしき君が歌声に調べを合わせ楽しげに）緑の葉々を震わすは　はやこれよりは見るを得じ」（岡沢武『英文学の三大哀歌――ミルトン・シェリー・テニソン作』篠崎書林、1973 年、6 頁）と歌う時、それは彼が自然を歌っているのではなく、彼が見たところの自然について歌っているのだ（"It may be contended that Milton was here speaking, not of nature but of his vision of nature."）。このエッセイは最後までこの調子で、ミルトンの次は、アルフレッド・テニスンにおける自然の擬人化を、そして自然の冷淡さを叱責する詩人として引用されることが多かったロバート・バーンズを批判している。

そもそもなぜリンドはイギリス文学史上に名前を残す有名詩人たちによる自然の擬人化、正確に言えば、人間の生き死に応じて自然も悲しむというレトリックを批判しているのか。その明確な理由はこのエッセイには示されていないが、参考になる箇所はある。例えば、"We were never before so conscious of the indifference of Nature to human tragedy as since the outbreak of the war."（Lynd, 161）というセンテンス、その後に続くワーズワースを批判した文章、"Wordsworth assured Toussaint L'Ouverture; There's not a breathing of the common air / That will forget thee. He exaggerated. The common air is more perturbed in the year 1918 by the passing of a single gnat than by the memory of Toussaint L'Ouverture." (Lynd, 161-162) から判断すれば、リンドが念頭においている「戦争」とは 100 万人単位の死者を引き起こした第一次世界大戦（1914 ～ 1918 年）である可能性は高い。

リンドがこの文章を書いた時代を念頭におけば、リンドが多くの人々や友人の死を見聞し、そのことを文章に書いたことは容易に想像できる。ワーズワース批判の文章の後、リンドが書いていることを要約すると、「戦争」における人々の死は悲惨である。しかし、ロンドン郊外を散策しても、彼の眼に映る生垣の木々はいつもと変わらないし、集まる鳥たちもそこに集まっているだけであり、リンドが言及するところの「戦争」による人々の死とは関係なく存在しているのだ、ということになる。リンドは、多くの人が無残に死んでいる状況で、自然を擬人化して人の死の追悼に使うという「古い思い込み」を批判し、自然の「冷淡さ」を直視して、叙情を廃し、人々の死そのものを見つめよう、そう読者に訴えているように読める。

ここで伊東と K の話に戻る。戦争末期の 4 月に入学した K がリンドの文章を伊東に暗誦させられたのは、おそらく戦争中であろう。すでに出征した兵士たちの戦死が伝えられている状況で、第一世界大戦における死と周囲の自然の無情を記したリンドのエッセイの少なくとも冒頭部分を学生たちに暗誦させた伊東の意図は、現時点では判断できる資料がない。しかし、戦況が悪化し、戦死者の報道が増えてきていた時期にこの英語教材を、K を含めた学生たちに暗誦させた伊東には、知人友

人も死ぬという状況の悲惨さと、その悲惨すらも超越した自然の無関心さに、学生の思考を向けようとしていたことは間違いないだろう。伊東の英語の授業は、ただ漫然と流行の英語作家の文章を読ませるという英語教育とは異質のものではあっただろう。

リンドの文章を使って英語教育を行った伊東の意図がわからないのと同様に、当時の学生たちがリンドのメッセージをどう受け止めていたのかもわからない。友人知人が、そして自分もまた死ぬかもしれない「戦争」の存在を否応なく想起したものがいたかもしれない。人の生き死にに自然は無関心なのだ、詩人や一般人の思い込みは古いのだというリンドの文章に、それならばミルトンやテニスンやバーンズのような詩ではなく、人の死を伝える適切なジャンルのテクストの必要性を感じたものがいたかもしれない。リンドが語るように、友人知人が死のうと自然は無関心なのであれば、自然などどうでもいい、全ては虚しいと感じたり、あるいは人の生死とは関係なく存在する自然、緑の木々や鳥たちの存在に、むしろ「戦争」でも変わらぬものの存在を感じて安堵するものもいたかもしれない。このように、ただ推測を重ねるしかない私にとって、伊東のリンド講義（と暗誦）が当時の学生にとってどのようなものだったのかを考える際に、Kの記述は大変貴重である。

Kがリンドの文章の冒頭部について、「今考えると当時の我々の人生にとって、極めて暗示的なものに思えます」と書いていることについてあらためて注目したい。これは被爆から半世紀を過ぎたKにとっては、リンドが1920年代に書いた、人の死と自然の無関心さについての英語テクストが、自身の被爆体験記で記したような友人・知人たちの死を連想させるテクストになっていったということではないだろうか。Kが記憶していたところのリンドの文章には、「とある危機的状況において」(at certain great crisis)、「友人が死んだ時、流星群が流れ落ち、太陽が暗くなった」(The comets flared and the sun was darkened at the death of the friend) という文言がある。もしかすると、自分の友人（the friend）が長崎の原爆投下によって亡くなったことを、リンドの文章を暗唱することで記憶にとどめていたのかもしれない。

もっとも、Kの記述を、Kの記憶の不確かさの証拠として評価することも可能だろう。実際、リンドの原文では“Comets flared and the sun darkened at the death of a great man”であるところを“at the death of the friend”と記憶し記述したKは、リンドの原文にあるセンテンス、“Even the death of a friend was supposed to bow nature with despair; and Milton in *Lycidas* mourned the friend he had lost in what nowadays seems to us the pasteboard hyperbole”を割愛しており、このセンテンスにある“the death of a friend”を、直前のセンテンスの“the death of a great man”に重ね書きしているからである。しかし、この「重ね書き」をKの単なる記憶ミス

として処理するのではなく、むしろKがリンドのテクストを、被爆後の半世紀間記憶し続ける中で、いわばそれを書き直して、この文言を長崎原爆でなくなった友人・知人たちのことを想起するための英語の媒体として捉え続けていたのだと考えてみたい。伊東という教員の意図とは直接関係ないところで、かつて学生であったKはリンドの文章をいわば英語で書かれた原爆文学として再解釈したのだと言ってもよいのかもしれない。

英文学者・教師である伊東は、「戦争」の後に人の生死と自然との関係を叙情的に歌うことを批判したリンドのエッセイを、人が多く死につつある戦争中に学生に対して教授した。そのエッセイを、長崎原爆で亡くなった、「偉人」ではないかもしれないが、かけがえのない「友人」を記憶するために読みかえたKのような学生たちをも「核時代の英米文学者」として評価するべきだろう。「核時代の英米文学」の担い手は教員や研究者だけではないはずだ。

※この研究ノートは、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）（一般）「長崎原爆に応答した英米文学者に関する基礎的研究」（代表：齋藤一、課題番号 18K00406）の成果の一部分である。